

内発的発展論を通して住民参加による村づくり

—群馬県みなかみ町（旧新治村）「たくみの里」の取り組み

704-022 徐 鳳浩 指導教官 村山元展

Local Development by citizens' participation through an endogenous development theory

— An effort of Minakami town (old Niharu village) Gunma Prefecture

XU FengHao

I はじめに

現在、日本の農村部においては全国平均より高い高齢化や人口の自然減、加えて農産物輸入の自由化による農業の一層の衰退、誘致した工場の閉鎖・海外移転が起こっている。また、人・物・金・情報などありとあらゆるものが、日本の都市部に集中し、その一方で、都市部に人を奪われた一般的に「過疎地」と呼ばれる地域が年々増加しているありさまである。今までの経済優先の政策やリゾート開発などの方法を改めて、新しい方法が求められている。そのような状況の中で、「内発的発展論」という考え方がある。本研究では「内発的発展論」の特性を整理して、それに基づく、新治村「たくみの里」発展の過程及び特徴を明らかにする。なお検討にあたり、住民参加による村づくりの視点から考察しました。

II 内発的発展論の共通点

内発的発展とは、人類共通の目標を達成するための経路であり、創出すべき社会のモデルが、多様性に富む社会変化の過程であることを前提としている。共通目標とは、地球上すべての人々、および集団が衣食住の基本的要求を充足し、人間としての可能性を十全に発見できる条件をつくり出すことである。1975年「内発的発展」が提起されてから、多くの論議が出てきた。各著者の論述

を研究しながら、内発的発展論の共通点をまとめると、以下のように整理できる。

- ①内発的発展論は、具体的な実証研究を通じてモデルとして構築されてきた。北海道の池田町、大分県の湯布院町や大山町等によく知られた先発事例だが、今や各地に多くの経験がうまれている。
- ②農村地域の都市中心部への距離が注目されている。都市の中心部に短時間で到達可能な地域においては、農業振興の諸指標は高いと言われている。地域の農業の活性化は、もはや都市との連携、地域経済社会の底上げなくしては不可能である。
- ③内発的発展を推進していくためには、地域住民の理解やリーダーシップが必要である。
- ④村の自然資源や高齢者の人的資源を活用して、農林業を基盤にした地域産業連関と、担い手の世代的連関をつくりだすことを目的とする。
- ⑤地域活性化によって農業の活性化が可能になる。農業維持の前提条件をなす。多様化した現代においては、地域活性化によって農業の活性化が可能になる、という側面を重視していく必要があると考えられている。

III 研究対象地域の概況・研究の視点

新治村は東京から約 160 km、群馬県の北端に位置している。豊かな温泉に恵まれ、多くの観光客が訪れている。この地域は古くから農業の中心は養蚕業で、県内屈指の生産高を持ち、長い間基幹産業であった。しかし、昭和 40 年代に入ると、養蚕業国内のストックと、韓国、中国からの輸入などによって、養蚕が一気に衰退した。そこで養蚕に代わる新しい農業経営として、新治村に観光を取り入れようとの考えに至ったのである。以下の表 1 は新治村における主な活性化の事業を年代別に並べてみた。

表 1 新治村主な事業

年代	事業名	目 的
昭和 54 年	野仏めぐり	村内歴史的な文化遺産を観光資源として活用する
昭和 60 年	たくみの里	地域に昔から伝わってきた「わら細工」、「木工」、「竹細工」など伝統手工芸を観光に入れる
昭和 62 年	香りの家	観光客に農産物の手作り体験させ
平成 2 年	農村公園構想	新治村全域を公園として位置づけ、観光資源を最大に利用し、農業とリゾートを密接に連携させて運営していく
平成 2 年	美しい新治村の風景を守り育てる条例	癒されるような農村をつくるため、景観というものを常に意識し、美しい村づくりを進め、そして、条例を使って、乱開発を防ぐ
平成 5 年	財団法人 新治村農村公園公社	温泉センター、たくみの里とフルーツ公園を管理・運営する
平成 7 年	総合案内所「豊楽館」	案内所・食堂・土産物売り場に加え、そばうち体験が可能になり、農産物直売所も設置されている。
平成 9 年	フルーツ公園	年間を通じて、お客さんがフルーツ狩りをできる施設

(調査により作成)

内発的發展とは、地域に住む人々の悩みを自らの力で解決しつつ、夢を実現する道筋を明らかにしていく作業であるから、計画をつくる過程にも実行する過程にも、住民が参加することは当然である。むしろ、住民が主体となった営みに、行政が参加するのが自治の本来あるべき姿であろう。新治村は地域の資源や技術を最大限に生かし、住民参加による「たくみの里」の取り組みが成功したと言える。まず、当時の助役の積極的な働きかけによって、「野仏めぐり」や「香りの家」が実現された。例えば、当時の「香りの家」の加工場には27キロしか加工できない米加工機と釜とミキサーだけがあった。バケツや包丁、まな板など、全部地域住民の協力の下に揃えられた。また、地域住民の理解と参加を求めるため、平成元年、立教大学の教授の指導の下に、地域の農家を中心に、旅館主や役場職員を集めて、ワークショップが開催された。こうして、地域住民は自由に計画づくりが出来、「農村公園構想」が生まれた。

IV 研究の結果

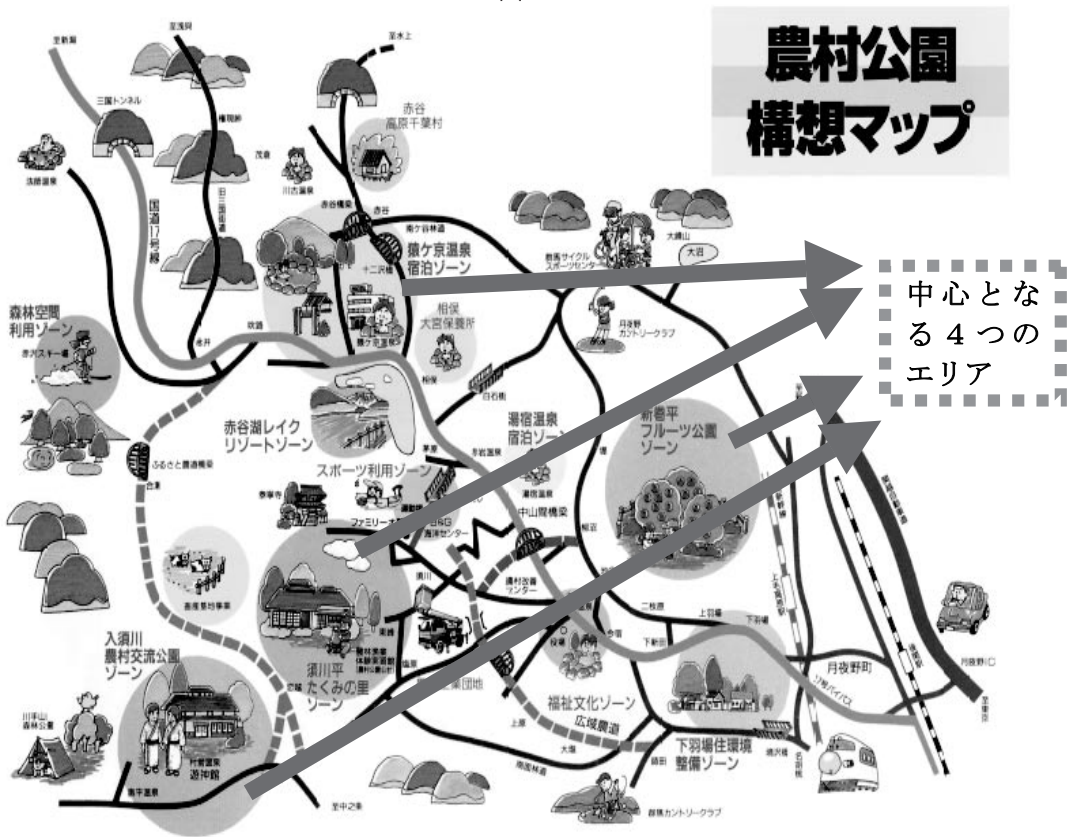
(1) 成果と特徴

- ① 「野仏めぐり」から「たくみの里」へ、来客数は飛躍的に増加された。野仏めぐり時代には、3万人～4万人の入り込み客数であったが、昭和62年に8万8千人、次の年に14万7千人、次は25万3千人へと一気に増えた。平成16年度、新潟地震と台風の影響で客数は減ったが、平成17年にはまた増えており、平成17年年末時点で50万人の見込みであった。初めは半信半疑だった村民たちも、だんだん積極的に参加するようになった。平成2年には地元の食材を100%使用したレストランが村民の手によって営業を開始。「たくみの家」も、村や県の金を使わず完全に村民の手によるものが立つようになった。また、農業を続けている村民にも、「たくみの家」やレストランなどに提供する農産物を増産して所得の向上を図ろうという姿勢が見られるようになった。
- ② 農産物直売所売上の増加。地域住民の積極的な参加によって、直売所の売上は年々伸び、当初の4千万円から、平成15年の7千9百万円まで増えた。平成16年の売上が減ったが、平成17年は順調に回復し、10月までの売上は5千3百万円であった。
- ③ 新治村は女性活躍の場になっている。「豊楽館」は地元の女性を雇って、そばうち体験の指導を担当させている。また、女性加工グループは地域の女性に人気があって、現在加工グループ16人、味噌グループ11人が活動している。
- ④ 村全体的地域づくりを考え、農村公園構想を取り上げた。図1農村公園構想マップに示すように、この農村公園内では、大きなエリアは4つある。これはゾーニングをしており、猿ヶ京温泉宿泊ゾーンは観光の拠点として、須川平たくみの里ゾーンは農業の拠点になっている。たくみの里ゾーンの左側は村が整備し、公社が管理している「遊神館」という大規模温泉センターであ

る。右側に新巻平フルーツ公園ゾーンがあり、これ村が整備し、公社が管理している。この大きな4つのゾーン以外に、村内には、温泉や、周りのスキー場とか、大都市の保養施設高原千葉村と大宮保養所などもある。

- ⑤ 「たくみの里」で一番有利なところは職人の生活の場と仕事の場が一体になり、いつ来てもすぐ体験できるようになっている。これに対して新治村以外の場合には、前持って予約しないとできないとか、何曜日の何時にしかできないなどと拘束される。せっかく遊びに来てもらうので、時間に縛られないように、「たくみの里」では家族と個人客に対して、いつでも来てくださいと対応をしている。

図 1



(出所：役場資料「新治夢未来」により作成)

- ⑥ 高齢者と若者の活躍。新治村の農業はサラリーマン兼業農家、あるいは退職者を中心とする高齢者農家で支えられているため、高齢者の生き甲斐対策として「年金+60万円」が打ち出されている。特に直売所では、村内の高齢者が自由に販売でき、所得が増大とともに、高齢者の力を発揮できる場所にもなっている。また、地域の一層のまとまりを図るとともに、若者にも参加できる仕組みとして計画されたものは「カラス天狗神輿」である。この神輿を通じて若者たちは地

域、新治村への愛着を深めており、須川小学校区の若者達が自主的に参加し、一年間をかけてすべて手作りで作成した。

(2) 課題

- ① 「フルーツ」公園はまだ機能に乗っていない。リンゴはワイ化栽培のため、10年くらいかかる。ブドウは棚式でやっているの、大体15年ぐらにならないと、生産が安定しない。同じ技術を持って、同じ方法でやっても、時間が足りないとおいしくならない。新治村「フルーツ」公園は平成9年に立ち上げ、平成10年に栽培ははじめ、果物はまだ7年目なので、全部成木にはなっていない。その関係でまだ生産が上がっていないのが実情である。
- ② 女性活躍の場が限られている課題。女性加工グループのこれからの生産は、売上がよくないため、現状維持するか、もしくは減少するという見通しである。公社に管理され、加工グループは作るしかできないから、加工品の宣伝や宅急便の利用など、公社の方にもっと力を入れてほしいと言っている。最近、加工グループがつくった商品は物産フェアにも持って行ってくれない。物産フェアに参加しても、グループの女性たちは連れて行ってもらえない。いつも公社の男たちが売りに行くから、売上が悪かったという。グループの女性たちは自分の商品を売りに行きたいという声が高い。そうすると、自分が作った商品をうまく紹介できるし、宣伝にもなる。「もっと売れば、生産も増えるはず。」という。
- ③ 「たくみの家」の後継者問題。今「たくみの家」のみんなにとって一番問題になっているのは、後継者の問題である。行政の方は、後継者がいなければまた別の職人を入れればいいという考えだが、職人たちはしっかりした人を育てて行くべきと思っている。ただし、今職人になりたい人（特に若い人）は本当に減っていると思われる。何故なら、一人前になるまでの5年10年厳しい修業に耐えられる人は少なくなっているからである。
- ④ 第三セクター経営改善問題。公社が経営する温泉センター遊神館は赤字の状態である。「たくみの里」に来たお客さんはついに温泉にも入る狙いが外れたので、経営改善対策が求められている。平成17年10月1日新治村は、水上町、月夜野町と合併したが、両町とも温泉が有名で、競争がもっと厳しくなると思われる。

V おわりに

新治村は「たくみの里」を通じて村全体に活力が生まれ、村民も観光客も共に喜ぶ観光地づくりに成功したと言える。ただ、「香りの家」や「たくみの家」のように、村に頼らず、地域住民の手によって立ったケースはまだ少なく、殆どの事業は補助金が入っていたが、新治村の場合は確かな成果も見られたし、これからのことを考えて、補助金支援の必要性はあると思われる。また、観光入れ込

み数はその年の天候によって左右されることは否めないで、年間を通じて安定した集客を確保するために、村民と連携し、観光客のニーズの把握や更なる美しい農村の維持に努めることが重要な課題となっている。

参考文献

- 鶴見和子 『内発的発展論の展開』 筑摩書店 1996年
宮本憲一 『地域経済学』 岩波書店 1990年
保母武彦 『内発的発展論と日本の農山村』 岩波書店 1996年
宮本憲一 『21世紀を地方自治の時代に』 自治体研究社 1993
宮本憲一 『日本社会の可能性』 岩波書店 2000年
宮本憲一 『公共政策のすすめ』 有斐閣 1998
『図説新治村史』 新治村史編纂委員会 昭和61年
新井直樹 『地域政策研究』 高崎経済大学地域政策学会 第8巻第1号 2005年7月